

<目的>寝具は健康との関連が深い製品であるが、科学的な検討は乏しく、各種の寝具が各人の好みによって使用されている現状である。本研究は、寝具の基本パターンを提案することを目的としたものであり、実態調査を基に、各パターンの相違を検討した。

<方法>広島市周辺に居住する18~20歳の女子学生 325名を対象に、1993年12月に、配票留置法による質問紙調査法を実施した。有効回収数 284名、回収率87.4%であった。調査内容は、身体特徴、家屋形態、就寝様式、寝具材料などである。データの集計・分析には、単純集計、クロス集計、相関分析などを行った。

<結果> 1. ふとん（敷き用と掛け用を含む）の中綿の種類としては、羽毛（72.9%）が最も多く、次いで、もめん（65.1%）、羊毛（49.6%）の順であった。<複数回答可> 2. 枕の充填剤の種類としては、そばがら（74.3%）が最も多く、次いで、ポリエチレンのパイプ（46.1%）、羽根（38.7%）の順であった。<複数回答可> 3. 就寝様式を、ベッド、畳、絨毯（カーペット）、床に分類した場合、使用割合は、54.0%:24.6%:15.8%:5.6%であった。4. 寝具の使用枚数は、就寝様式の相違がみられず、敷き用では1枚（敷きふとん）が、掛け用では2枚（毛布+掛けふとん）が最も多かった。5. 電気毛布の使用は、4.9%であり、掛け用と敷き用の割合は、ほぼ同率であった。